

第1章 序論

言語習得において、4つの技能領域の中で、学習者がもっとも困難に直面するのがライティングであると言われている (Bialystok, 1978; White, 1981; Brown and Yule, 1983; Nunan, 1989)。母語の習得においても、言語の音声面は自然習得されるのに対して、文字面の習得には形式的な学習が不可欠である。ネイティブ・スピーカーという言葉がある一方、ネイティブ・ライターという言葉は存在しない。第二言語あるいは外国語の習得においても、ライティングは学習するのが難しい技能であるのかどうかを、日本人英語学習者についての研究事例から考えてみる。まずは、中学生の例を参照してみる。Benesse 教育研究開発センターの「第1回中学校英語に関する基本調査報告書【教員調査・生徒調査】」(2009)によると、「英語の文を書くのが難しい」というアンケート項目に対して、中学校2年生の70%以上が「あてはまる」と回答している。4技能の中ではもっとも高い数値である。とりわけ、英語が苦手がかつ嫌いであると認識している回答者に限れば、85%以上が英語の文を書くことが難しいと回答している。このことから、英語を学校で本格的に学習し始めて2年足らずの間に、書くことに苦手意識を持つようになる生徒が多いことがわかる。この問題に対して、教える立場の教師は、苦手意識が比較的低い音声面の技能と合わせてライティングの技能を指導することによって、学習者の負担を軽減させようとしている。同時に行われた教員へのアンケートによると、90%以上の教員が「複数の技能を統合的に用いる活動を行う」ことを重要だと認識している。

次に、日本人高校生英語学習者については、指導する立場の高校教員へのアンケート結果を参照してみる。ELEC 同友会英語教育学会ライティング研究部会(2004)のアンケート調査によると、高校教員の70%以上は、「英語の段落構成を身につけさせること」や「英語の論理構造を身につけさせること」に困難を感じている。つまり、文レベルを超えて、パラグラフレベルの指導に困難点が見られるということである。加えて、文レベルに関わる文法指導や語彙指導にも70~80%の教員がその難しさを認識していることから、日本の高校におけるライティング指導では、語彙や文構造といったミクロなレベルから、文章構成といったマクロなレベルに至るまで、困難点が存在することがわかる。また、リスニングやスピーキングなどの音声面の技能との連携に対しては、その難しさを認識している教員が比較的少ないため、中学校同様、ライティングを他技能と統合させて指導することの重要性が高校でも浸透しているのだろう。

次に、日本の大学英語教育におけるライティング指導についての調査を見てみる。日本国内の国公立大学を対象に実施したアンケート結果によると、ライティングの授業では、パラグラ

フ・ライティングやエッセイ・ライティングに指導のフォーカスが移り変わってきたが、メモや手紙など日常生活に必要な基礎的なライティング力を養うことを到達目標にせざるをえない状況があるとしている（田辺、2003）。また、同様に、日本国内の国公立大学を対象に実施した別のアンケート（高田、2003）の結果を受け、木村他（2010）は、他の技能に比べて、ライティングの指導は教員の理想に現実が遠く及ばないとしている。高校同様、大学でも、パラグラフというマクロなレベルのライティング指導を目指しながらも、そこまで到達できないという問題点を抱えていることがわかる。

このように、日本の中学校から大学までのライティング学習または指導については、中学校で苦手意識が芽生えてしまうことに起因してか、パラグラフの単位までの学習が効果的に実践されていない傾向がある。クラスサイズなどの物理的な問題も存在すると思われるが、ライティングという技能自体に潜む学習の困難さはどのようなものであろうか。Nunan (1989) によると、ライティングという行動には、非常に高い認知的負荷が要求され、書き手は同時にいくつもの処理を実践しなくてはならない。文レベルでは、書くべき内容、形式、文構造、単語、句読法、綴り、文字の形などに注意を払う必要があり、さらにそれ以上のレベルでは、全体として内容の一貫性が保たれていて、かつ結束関係が成り立っているテキストを構成するように心がける必要がある。文レベルの処理と文以上のレベルの処理を同時並行的に実行していくことが、特に学習段階の初期にある学習者にとっては、難易度が高いのであろう。

ライティングが本質的に難易度が高いことに起因してか、上述したとおり、音声技能と統合してライティングを指導する機会が増えているようである。ただし、20年以上前の平成元年公布の中学校学習指導要領ではすでに技能を統合した言語活動が取り上げられているため、特に目新しいことではない。逆に、ライティングを他技能と統合することによって、ライティング技能を単独で扱うことが少なくなり、スピーチの原稿を書いたり、話し言葉に近い文章を書くことはできるようになっても、高校生が抱える問題点として先に取り上げた「論理的な文章を書くこと」については大きな課題が存在している。現に、平成20年7月に文部科学省より刊行された『中学校学習指導要領解説 外国語』では、「文と文とのつながりなどに注意して文章を書くこと」という言語活動について、「内容的にまとまりのある一貫した文章を書く力が十分ではないという課題」が存在することを指摘している。この課題は、現行の指導要領が施行された後の平成15年度に実施された「小・中学校教育課程実施状況調査」（国立教育政策研究所 教育課程研究センター、2005）の結果が一つの根拠となっていると思われる。この調査では、15万人（1学年約5万人）程度の中学生を対象として、聞くこと、読むこと、書くことの3領域に関してペーパーテ

ストを実施した。書くことのテストにおける「トピック指定問題」では、「友人や先生の紹介」、「夏休みにしたこと」、「私の好きな季節」、「学校生活の紹介」、「先週身のまわりで起こったこと」など、複数の英文を書くことが求められる問題が出題されたが、どのトピックの問題でも定着が十分ではなという結果が公表されている。具体的には、4文以上のまとまった内容を書くように指示された問題において、「4文以上書いてあり、文章の内容のつながりが良いもの」という基準を満たした解答は34.9%にとどまった。この基準に満たない解答例としては、*I like banana. I like cat. I like dog.*のように同じ文構造を羅列しただけで話題に発展性のない英文が見られた。この調査結果を受けて、様々な話題に関してまとまった文章を書く活動を充実させることの必要性が示唆されている。同様に、平成17年度に実施された高校1年生を対象とした「高等学校教育課程実施状況調査」(国立教育政策研究所 教育課程研究センター、2007)によれば、4文以上のまとまりのある文章を書くことが指示された問題において、「4文以上書いてあり、文章構成が良いもの」という基準を達成した解答は25.0%に過ぎなかった。これらの調査結果からもわかるように、現在のライティング指導の課題は、パラグラフの中で、文と文とが意味的あるいは構造的に適切につながるように書くことであると言える。言い換えれば、学習者が文と文との間に結束関係を構築できるようになることが、これからのライティング指導で特に力点を置くべきことであると言える。